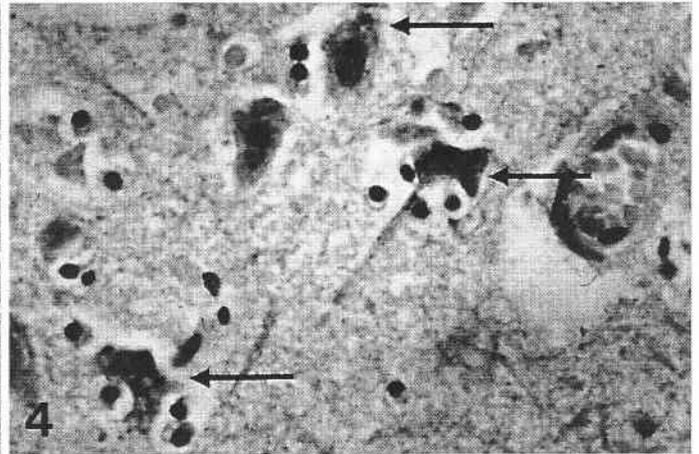
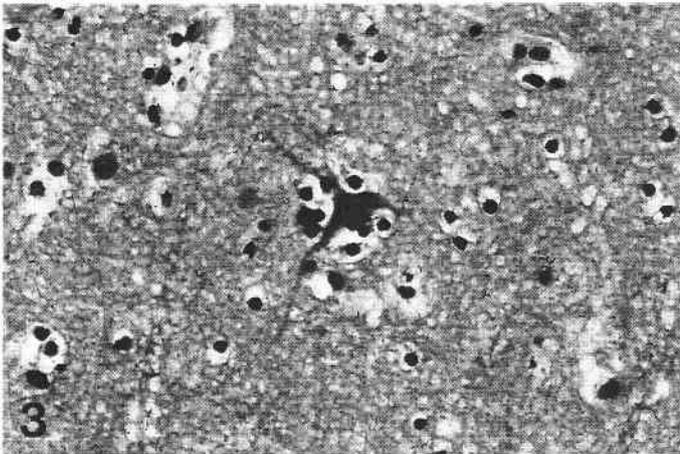
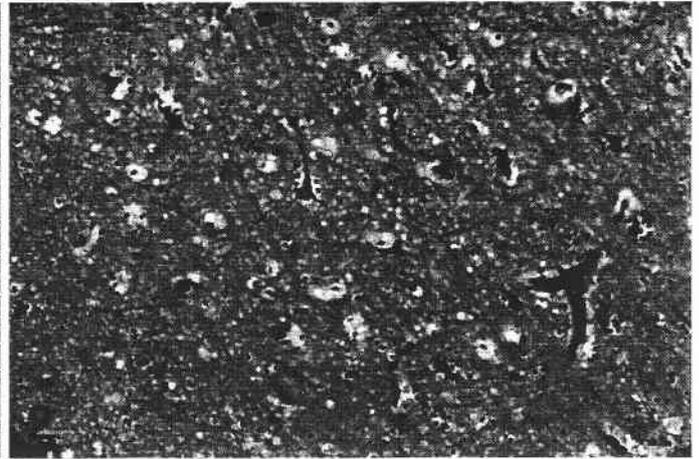
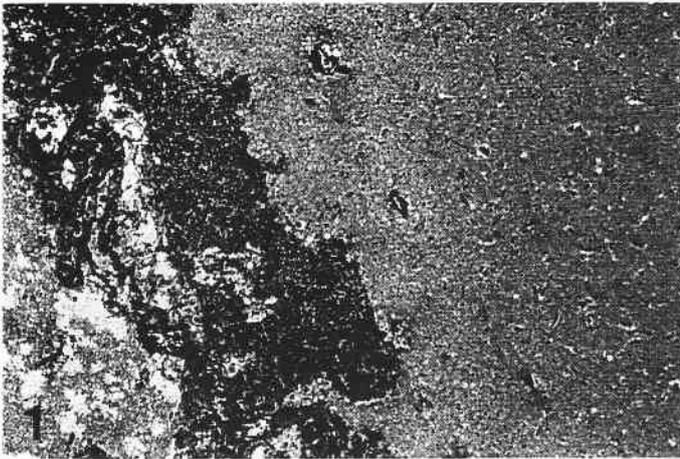


## カマイルカの大脳

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第39回獣医病理学研修会標本 No. 739



動物：イルカ，カマイルカ Pacific striped dolphin，雄，年齢不明（成獣）。

臨床事項：平成10年3月22日に宮崎県青島海岸に漂着。発見時，本例は重度の衰弱状態にあり，自力遊泳不能で同日死亡。翌日（死後14時間）剖検した。

剖検所見：体長約140 cm。発育良好。外傷等の異常を認めず，軽度の肺虚脱，脳硬膜の充血，軟膜の浮腫等以外に特記すべき異常はなかった。

組織学的所見：病理組織学的検索の結果，脳のほぼ全域において非化膿性炎症像が認められた。大脳では，軟膜においてリンパ球を主体とする瀰漫性細胞浸潤が認められ（写真1），大脳皮質深部を中心にリンパ球を主体とする囲管性細胞浸潤やミクログリアの増生が観察された。同部では，萎縮・変性した神経細胞が多数認められ（写真2），この様な変化を示す神経細胞の周囲にはミクログリアが集簇し，神経食現象像を呈していた（写真3）。大脳白質では，GFAP抗体陽性の腫大したアストロサイトの瀰漫性増生が観察され，稀に囲管性に脂肪顆粒細胞 gitter cell の集簇が確認された。また検索した36カ所の脳パラフィン切片中，大脳皮質1カ所に限局して，

トキソプラズマ類似の原虫シストが認められ，同シスト周囲には少数のミクログリアの反応が見られた。検索したHE標本すべてにおいて封入体は確認できなかったが，イヌジステンパーウイルス核蛋白に対するモノクローナル抗体（1:100，CDV-NP，VMRD Inc., USA）による免疫染色により，神経細胞の細胞質内に顆粒状のCDV-NP抗原が検出された（写真4）。CDV-NP抗原は神経食現象の認められた部位に一致して脳内に広く分布していたが，脳以外の組織では確認できなかった。

診断および考察：上記所見より，本例の診断を“カマイルカにみられたモルビリウイルス感染による非化膿性髄膜脳炎”とした。イルカのモルビリウイルス感染症は，1990年代初頭の地中海における大発生以来，世界各地で報告されているが，わが国では確認されていない。本症例では，病変およびウイルス抗原は脳に限局して認められ，明瞭な封入体形成に乏しい点などが特徴的で，これらは Domingo, M. ら（Vet. Microbiol. 44: 229-239, 1995）が報告したイルカの慢性モルビリウイルス感染症の病態に類似していた。